

時流と作家の姿勢

橋本三郎

全道展も今年で早くも18回展を迎え、益々隆盛を続け、とくにここ数年間の新人の擡頭は目ざましいものがある。

まことに『あっ……』というような現象が、中央画壇において多数の授賞、あるいは会友会員となって現われたことを皆様方も気づかれることであろう。

この3,4年の成果は、実に十数年にわたる雌伏に耐え抜いたことにほかならないのであって、全道展の北海道における指導的役割は完全に遂行されている事実を物語っているのではなかろうか。

全道展の今日あることは判断力の明快さのもとに、互助の心と人の和の契が今日まで崩れることのなかったことを有力に物語っているのである。

会員一同益々意慾を新にして、人知れぬ才能を発掘その推ばんに努力をつけることはいうをまたないが、画家として後輩を世に送り出すときは当然のことであっても、春の野の青空のように美しいものに想われるのである。

私の画生活も永いものとなったが、その間、画壇の雲行きは時として晴、また雪空とはなつて抽象、アンフォルメル、様々な運動が地球の自転とともに、あるいは深い養分の累積となつて今日にいたつたのである。

われわれはその渦の中で今日を迎えている訳なのだが、そのあわただしい絵画主調の流れをどのように受止め、身をおくかは各人の良識と判断に負うところとなるのである。

私はどちらかという流派にこだわらないが、どのような画風であっても、今日的性格を持たない仕事は適確とはならないし、どのような色の時流にあうことがあつても、あるいは青色に染つたとしても、自分の絵画観は自ずと筋が通っていなければならないと思うのである。

さて、昨日までの中央画壇に視点を向けて見ると、世界の流れとともに抽象一辺倒の感をまぬがれなかったことが事実であつた。

このようなことは日本の過去を注意すると、同じように『無節操』なくらいにくり返していることで不思議はないのだが、それは絵画の伝統に対する良識が無かつたことにもあるけれども、日本人全体の教養の欠如に依る判断の甘さが、ラップズボンとなり、ハッピーの流行を臆面もなく採り入れる破目のように、飽きてしまうと敝履の如く捨ててしまう、恐ろしいくらいな楽天さを発揮する

のであって、残念ながらその轍を絵画の世界も免れることはできなかったのである。日本の画壇というより、日本人の性質は実に几帳面であつて、白、黒、を明らかにしなければ気がすまないのである。

抽象が壁に來たとなると、つぎには『具象では』などとせっちなことになる傾向が強くなり、やがて抽象がほんものの壁にぶちあたることになるかも知れないが、その時になつて残る作家も何人かはあろうし、その作家こそ抽象の心を身につけた作家といわれるのであろう。しかし、時の流れは悠久としておまゝに自転していくのであつて、芸術の流れも留まることはなく、今日の抽象形式が絶対にいつまでも主流として残るとは限らない。

われわれ作家はその渦中であつて、どのような姿勢で受け立つかがまことに重大なのである。この時にあつて、始めて絵画形成の真髓をいかに把握しているかが個人差となつて物をいうのであり、残るか消えるかの分岐点になるように想われるのである。

今日の抽象は壁に來ていると様々いわれてはいるが、抽象絵画の本質をよくつかんでいないからそのようなことをいわれるのではない。抽象画は一般に難解なのは認めるけれども皮相な出かたや、様式の固定、マチュールの行き詰りなどによって芸術の本質が決定するものではない。

しかしながらいやすくも芸術と名のつく作品には、自ずと新鮮な意慾と感動をとまなうもので、流派と壁には何らの関係もないのである。資質の高い作家には、行き詰りや壁もないのであつて、狭い道ではあつても永遠につながる路は必ずやあることを信じている。

私は自分を抽象画家とも想っていないし、具象とか、抽象とかウンヌンするのがおかしいのであつてどちらも優劣はないと想うのだが、今日の作家である以上、今日的近代性がなければ意味はなく、新しい造型性は必至条件であることは間違いないことであつて、今までにないより新しい表現様式を持って、我が芸術を完成に持っていくのが、各人の才能と創造力にかかってくるのである。

そのような創作の可能を期待される作家は今日的きびしい抽象の世界に身を以て通りぬけることのできる幅のある画家によって始めて可能であるといえるのではなかろうか。

近き将来には、必ず出現するであろう最もユニークなスタイルを持つ珠玉のような芸術は、具象、抽象、アンフォルメルなどとあらゆる影響の集約された未知の様式であることを想うのであるが、何れかその幸運のチャンスに恵まれる作家は、何処に雌伏しているかは神ならぬ身の何人にもわからないのは残念なことではある。

私は15,6年前この会場であつて、今日何の不思議も感じない総合主義という新語を使い失笑を買つた記憶を想いおこすのだが、時代の推移というものは、時には心楽しいものがあることを附記したい。